TEAM旦波　活動報告ポスター

■活動テーマ
私達、TEAM旦波は、**「丹後地域の地方創生」**を目指して取り組んでいる団体です。2018年は、関西圏を中心とする都市部の若者を丹後地域の企業に送り、地域企業の課題解決に取り組むインターンシップのコーディネートに注力して活動をしていました！

インターンシップについて

2018年のインターン生には、8名の参加者と6社の企業にご参加いただきました。
そして、今年からインターンのテーマを**「企業の経営課題の解決」**に絞り、難易度の高い課題にインターン生に取り組んでもらっています。中でも、舞鶴市にあるDIYSTYLEという企業では、**「普段使いのできる防災グッツの開発」**という会社の新規事業にインターン生が、参加させていただき、2019年の春頃の発売に向けて日々、取り組んでいます。

宮津市長に表敬訪問させていただきました！

2018年8月に、私達、TEAM旦波の日々の活動を城崎宮津市長に報告させていただく機会がありました。

丹後地域においても「天橋立」を始めとする観光分野で牽引している宮津市のあらゆる課題をお聞きさせていただいたことで、私達の今後の活動に大きなヒントを得ることが出来ました！

■今年の活動を踏まえての振り返り

私達は、今回の活動を通じて、様々な学びを得ることが出来ました。それは、「顧客が何を求めているか？」を考え抜くということです。当初、予定していた人数の参加者や企業が集まりませんでした。それは、相手の求めているものに適したものを提供できなかったためです。それ故に、相手のニーズを踏まえて活動をしていくことが、大事だと感じています。

■今後のビジョン・活動内容

私達は、今後も「丹後地域の地方創生」を目指してより一層活動をしていきたいと思っています。インターンだけではなく、インターンで得た地域企業の繋がりを活用して、地域企業と社会人の「副業・兼業」のマッチングや地域企業の「事業承継」また、地域での「起業家育成」などの地域の課題についても力を入れていければと思っています。

TEDxRitsumeikanU

活動目的

TEDを立命館に紹介すること。
TEDxRitsumeikanUはアメリカ発祥の世界的イベントTEDの「Idea Worth Sharing（価値のあるアイディアを世界に広める）」という理念を引き継ぎ、立命館大学特有の魅力、そして国際学生都市としての京都の魅力をアピールすることを目的としています。

活動内容

今回のTEDxRitsumeikanUは「Exploration（探求）」をテーマに京都のゲストスピーカーたちからの様々アイディアを学生たちにインスピレーションになる様に心がけました。

活動の成果

立命館大学教授から起業家まで、魅力ある5人のゲストスピーカーから言語、メンタルヘルスや夢などについてのアイディアを100以上の学生に語られました。立命館大学で初のTEDイベントを企画した経験はこうしたチャレンジの一つだと考えます。新しいアイディアを提案するだけではなく、こうした「これまでになかった」ことへ果敢に挑戦し、様々な困難を乗り越えて、人生珍しい経験をできました。

今後の活動内容

今後もTEDの理念を受け継いで、色んな魅力あるのスピーカーを誘い、経験をシェアしながら学生たち自分の殻から抜け出すきっかけになる様に立命館大学で毎年の開催を目指しています。特に2019年は、200人以上のオーディエンスを目標にしています。

～natuRable とは～

2016 年 6 月に結成された 3 キャンパスの学生からなる団体です。ミクロネシア連邦のポンペイ島にて環境問題に取り組んでいます。今年度は 9 月 11 日から 21 日に渡航し、ごみ問題の現状について学び、現地の小学校でワークショップを実施しました。

～ミクロネシア～

太平洋西部に位置し、東西 2500km にわたって広がるヤップ、チューク、ポンペイ、コスラエの 4 州と 607 の島々からなる連邦国家です。首都はバリキール、公用語は英語です。

～ミクロネシアのごみ問題～

島国であるミクロネシアには、ごみ処理施設が整備されておらず、さらには現地住民の環境問題の意識の低さから、ポイ捨てなどのごみ問題が深刻になっています。

2018 natuRable 成果報告

～小学校での環境教育活動～

滞在期間中に計 5 回、2 校の現地の小学生に対して環境教育を行いました。ごみが分解されるのに何年かかるのかを一緒に考えて、自分たちの島の自然を守るために何ができるか考え、自分の言葉で行動宣言を書いてもらいました。

～今後の活動～

これまでの 3 回の渡航を通して、年々ごみ問題の改善が少しずつ見られた。次世代を担う子供たちに、今後もごみ問題について一緒に考えていこうと思います。

～大使館、JAIC、環境局～

渡航中、現地の情報収集のためお話を伺うことが出来ました。事前に調べていたことと違うこともあり、ミクロネシアの現状を知る上では、大きな収穫となりました。

夏の鴨川座

カモシネマ14

カモシネマ14とは？

京都の代表的な河川である鴨川の美化を目的とした催しです。今年度で14回目の開催となりました。主な活動としては日中には有志の参加者やボランティア団体の方々と共に鴨川の河川敷の清掃活動を行い、日没後には野外にて映画を上映するというものです。その他にもミスキャンパストークショーや水鉄砲を使ったゲーム企画などを実施しました。

カモシネマ14実行委員会とは？

カモシネマ14実行委員会はこのイベントを主催している学生団体です。立命館大学広告研究会の有志で構成されています。

活動テーマ

私たちは、京都の美しい景観を生み出している鴨川を保全することを大きな目標として定めています。また主な協力団体である鴨川を美しくする会の「美しい鴨川を次の世代へ引き継ごう」という趣旨に賛同し、学生の立場から環境保全の意識向上を目指し、毎年活動を続けています。また、このカモシネマ14は京都府薬務課「危険ドラッグ防止コンテスト」の映像や京都国際映画祭の優秀作品の上映、ミスキャンパスの活動紹介など学生や団体の活動発表の場として、地域と学生がより密接な関係になることを促進する目的もあります。学生が地域活性に関心を持ち、地域の人々と手を取り合って美しい鴨川を引き継いでいく手助けとなれるようカモシネマ14は活動しました。

今年度の活動

・ぴかかも（清掃活動）

鴨川の河川敷の清掃活動を行いました。今年度からはボランティア団体にも声をかけ、清掃活動に力を入れました。長年の検討している有志参加者を増やす試みは来年度も続けていこうと考えています。

・かもがわであそぼ

清掃活動と映画上映の間に行ったイベントです。参加者は水鉄砲で的を倒し、その得点で競います。上位入賞者には京都にちなんだ竹で作られた景品を授与しました。多くの人数は集められませんでしたが参加者の方には喜んで頂けたと感じています。

・立命館＆同志社ミスキャントークショー

前年度も行っている企画ですが今年度は上記二つの大学のミスキャンパスさんの協力を得ることができ、企画の規模を拡大することができました。広報活動が不十分であったため、企画の持つ集客力に対して実際の集客人数が伸びませんでした。魅力的な企画であるため来年度はより活かすことができるよう工夫していきます。

・映画上映

今年度は「セトウツミ」を上映しました。二人の男子高校生が河川敷で語り合うという内容の作品で、アンケートには「学生時代を思い出した。」「青春を懐かしむことができた。」などの感想がいくつも見られました。親和性の高い映画を上映することで来場者の関心を強く惹き、鴨川への愛着、美化意識をより深くすることができました。来年度も鴨川の河川敷で見るのに相応しい映画を上映したいと思っています。

来年度の課題

来年度はカモシネマというイベントをより大きく、有名なものにしたいと考えています。

それは今年不十分であった広報活動や他団体との協力を強化し、カモシネマの知名度を向上させることで本懐である鴨川の自然環境の保全や地域活性に繋がると考えたからです。しかし同時に、今年度協力して頂いた団体や企業とも良好な関係を維持することで組織として安定することも大切だと感じています。来年度は今年度得ることができたものをふまえて、更なる発展を遂げることができるよう精進していきます。

そよ風届け隊

東日本大震災後に設立し、福島県楢葉町での復興支援活動を行っています。

活動目的

2012年に設立し、設立当初はいわき市で足湯を用いた傾聴ボランティアを行ってきました。その後は楢葉町に活動拠点を移し、行政や町民の方と協働し、楢葉町のまちづくりやコミュニティ形成のお手伝いをしています。

楢葉町とは

2011年3月11日
東日本大震災発生

震災により地震・津波・原子力の複合災害に見舞われ、全町避難を余儀なくされました。

→ 2015年9月5日　避難指示解除

2017年4月に小中学校や子ども園が再開。

2018年6月にはここなら笑店街(商業施設)がオープンし、7月にはJヴィレッジが再開しました！

町内居住率 52.25%
（2019年1月31日時点）

設立～現在までの主な活動内容

2012年～	2015年	2016年	2017年	2018年
足湯CAFÉ				
		ならはかわら版		
		めちゃめちゃよくばりキャンプ		
			Life上映会	
			ならは31人の“生”の物語	
			やる気ラボ	満福ふくしま
				畑プロジェクト

その他にも田植えや稲刈りのお手伝い、町のイベントなどにも参加しています。

★町の復興状況を捉えながら幅広い活動を展開しています！

★福島だけでなく関西での発信活動にも力を入れています。

2018年度の活動内容とその成果

背景	日々変化していく町の状況や町民の想いを記録し伝えていくことが重要である。町の復興アーカイブとしての役割を果たすことを目指す。
目標①	町の復興の歩みを記録し続ける

ならは31人の“生”の物語2018

◆ 実施期間：2018年9月19日(水)～24日(月)
◆ 実施場所：福島県楢葉町
◆ 参加者：立命館大学の学生8名

一般社団法人ならはみらいと立命館災害復興支援室が2015年から始めた取り組みで、毎年楢葉町に関わる方々31名にインタビューをし、その内容を400字でポスターにまとめます。

本企画では31名のうち10名を担当し、2018年6月にオープンしたここなら笑店街で働く10名の方にインタビューをしました。

★一人ひとりの物語や想いに向き合いながら、10名分のポスターを完成させることができました。

★同企画内の1日Caféでは、2015年から作成してきた100名を超える方々のポスターを展示しました。皆さんじっくりとご覧になられ、「○○地区の○○さんだ！」という会話も聞こえてきました。

背景	避難指示解除から3年半が経過したが、町の再生のためには今後も町民同士が活発に交流できる環境が必要である。
目標②	町内の交流人口活性化と町民同士の交流促進

畑プロジェクト

町外からのボランティア向け宿泊施設がある松館地区に度々訪れる中で住民の方と交流が増え、このプロジェクトが始まりました。

町民と学生が一緒に農作物を育て、震災後の休耕地を新たな交流の場にすることを目指しています。

●視察
楢葉町を中心に農業に関連した施設や農家さんの訪問などもしました。

●作付・収穫
町民の方のご協力のもと様々な作物を育て、夏には収穫した野菜を使用したイベントなども実施しました。

●1日Cafe
畑プロジェクトで育てた野菜や楢葉町の農家さんから仕入れた野菜を使ったメニューを販売しました。

◆ 実施日時：2018年9月24日(月)11:30～15:30
◆ 実施場所：福島県楢葉町 みんなの交流館 ならはCANvas

★Caféでは約50名の方々にお越しいただきました。「美味しかった。」「またこのようなイベントを実施してほしい。」などの声が聞かれました。

★畑作業やイベントを通して町民同士や町民と学生の交流を活発化させることができました。

背景	関西では物理的な距離もあり、東北に対する関心が薄い傾向にある。実際に現地の様子や声を届け、現状や魅力を知ってほしい。
目標③	福島の現状と魅力を関西で伝える

満福ふくしま ～福島の美味しい食と酒と～

昨年度の「やる気ラボ」に引き続き、今年も福島の食の魅力を発信するイベントを開催しました。

◆ 実施日時：2018年12月5日(水)18:00～24:00
◆ 実施場所：京都市（北野白梅町近く）「魔法にかかったロバ」

●福島の美味しい食と酒
これまでの活動で繋がりができた福島県の生産者さんを中心に食材を仕入れました。

●現地の方との交流
福島県楢葉町で働く方二名にゲストとしてお越しいただきました。楢葉のグッズ販売も行いました。

●360度、福島！
お店全体に福島に関する展示をしました。

★40名近くの方々にお越しいただきました。

★それぞれが思い思いの福島を語り合っていたのが印象的でした。

★東北に関わりがある方が多かったが、現地のことを全く知らない人にも魅力を伝えたいとも思いました。

今後の活動内容

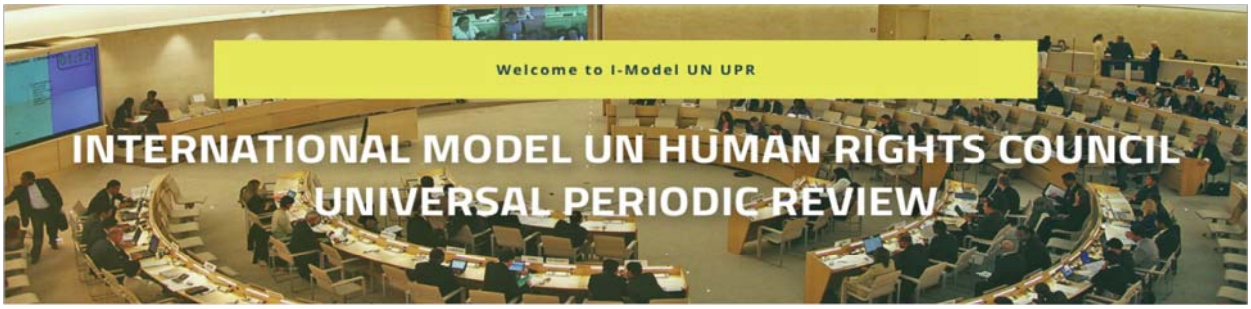
2019年度も楢葉町の変化（復興状況）を捉えながら、これまで実施してきた事業の継続や、新たな活動を行っていきたいと考えています。

そよ風届け隊　検索

活動の様子などをUPしています！→

Facebook　Twitter

メール：soyokazehuu2013@gmail.com



模擬国連UPR立命館大学チーム

活動内容

今回私たちが参加した「摸擬国連人権理事会」では、実際に国連で行われているUPRと呼ばれる各国の人権状況を普遍的に審査する枠組みを模した形で、日本・韓国・香港・北朝鮮を代表する各国の学生のチームがお互いの国の人権状況への問いかけとそれに対し応答することを行いました。人権問題への関心を深めたり、UPRに対して興味を持ち批判的な角度から見ること、近隣国の学生との相互理解を深めることができました。

活動目的

私たちの活動目的は、主に東アジア各国の人権問題について、現在行われている国際機関の調査の仕方を実践的に学ぶことでした。これにより、個人的に研究することとは違う視点と方法論を得ることができました。各国の学生たちと語り合いながら、お互いの国の人権問題についても学び合うことができました。それ以外にも人生経験として、重要なことを学ぶのも、活動目的の一つと言ってもよいでしょう。このような語り合いを通じて、外国人学生から刺激を受け、望ましい競争心とグループワークなど、貴重な体験をすることも、大切な活動目的でした。

活動の成果

次世代のリーダーとなる、アジア各国からやってきた学生との交流により様々な刺激を得ることができました。彼らの研究努力、情熱、発言力を見ることは、日本チームにも大いに刺激になりました。眼を見張るような流暢で理論的な言語運用能力もさることながら、自国の人権問題に加え世界の人権問題への興味関心の高さは素晴らしいものでした。私たちもこれからの日本や世界を背負っていく責任があり、そのための努力を惜しんではいけないということを再度認識することができました。またこのイベントの最終日には、今回の開催団体であるヒューマンアジアの方々に、韓国の人権団体の数々を案内してもらいました。特にめったにツアーなどを認めないUNHCRへの訪問は貴重な体験でした。そこでは、訪問だけでなくレクチャーも受けさせていただき、実際に難民など困難と向き合う人々と対応する人々の強い意志、現状を肌で感じることができました。

活動の成果

「チームワーク」を活かして社会に入る準備をすることができました。私たち立命館チームは、メンバーがたがいに初めて対面したのが今年の４月に入ってからで、人権に関する様々なテーマの研究を役割分担したり、つねにお互いが忙しい学生生活の中で、計画を立てコミュニケーションを維持することは容易ではありませんでした。それでも、些細な事務的なことから研究のことなど、いつもお互いに知らせ合ったり、現地のホテルでは夜遅くまで一緒に研究するなど、これからの社会生活にも活かせる経験を重ねることができました。このチームでの活動は今回限りですが、この活動を通した経験は、これからの人生において大きな糧になると信じ、人権問題をはじめ様々な大きな問題にチームメンバー一人一人が興味関心を持ち、次世代のリーダーを目指していこうと思います。

伊根町本庄地区って？

京都府奥丹後に位置し、舟屋の里として知られている伊根町の本庄地区。人口367人、高齢化率43.43%と人口減少と少子高齢化の著しい地域であり、住民組織による自治的活動が困難となっている。しかし、山と海と平野の恵まれた自然条件のもと育まれた、浦島伝説の伝統文化や幻の小豆である菰池大納言、そして「ひと」という地域資源が潤沢にある。

空き家プロジェクト

本庄地区農村環境保全会(以下、保全会)との提携のもと、町より借り受けた空き家を活動拠点として年間通した様々な都市と農村の「交流・協働事業」に取り組む。

ミッション

【地域活性化事業を通じてみんなが輝く社会を実現する】

ビジョン

地域に多様な人々が「交流と協働」を目的として集まり、ホストとゲストの枠組みを超えて対等に交わる〈ハイブリディティな公共空間〉を本庄地区内に形成する。このような空間での経験の繰り返しによって、特定の課題解決のための取り組みに留まらず、当該地区において多様で多層的な課題解決のシステムが構築されていく。

Orang Earth

今年度の活動のポイント

団体設立2年目として…

・年間を通じて計12回伊根町に学生を送り込み、市内で本庄地区住民を招いた活動を計2回実施。
・オランアース運営本部の設置。
・参加者への活動実費負担の開始。
・保全会との共同運営の具体化。
・他団体とのコラボレーション実施（オリオリプロジェクト、軽音サークル、NPO法人ミエルカ）。
・新イベントの企画・実施（「夢」をテーマにしたワークショップ、高校生との課題解決型プログラム、一日店長の店「まほろば」での出店）。
・活動発信／意見交換（オーストラリアのカンファレンスでの口頭発表２回、「京の公共人材大賞」での口頭発表、優秀卒論としての研究成果、SNS活動発信）

今後の展望

・活動の方向性：年間を通じた交流協働活動を継続的に実施しながら、年間をかけて取り組む特定テーマを絞る。来年度は、「食」をテーマにして、保全会との屋台出店や、農作業のお手伝い、商品開発などを行うことを予定している。
・活動資金：奨学金を、団体の自立度を高めていくための資金として充てる。
・運営体制：現一年生を中心とするチームを作り、中心で動ける形をつくる。それにより、多層的な運営体制を実現する。

立命館大学　教職沖縄研修

活動テーマ：沖縄独自の環境や問題について学習・発表などを行い、教員になった際子どもにどう教えるかを考える。

【活動の成果】

今年度は「繋ぐ～何を学びどう発信するか～」というテーマのもとで活動してきました。この沖縄研修だけで学びを終わらせないためにも、この教職沖縄は教職課程を履修する学生によって成り立っていて、将来教壇に立って生徒と向き合う人が多いということからも、昨年度のテーマである「伝える」を引き続き掲げつつ、そのために私たちはどのように発信者となっていくのかということを全員で認識して取り組んできました。初日の環境学習では、宿泊させていただいた森の家みんみんの藤井さんによる学習会が行われ、沖縄の自然に触れるとともに、普段は目にすることのない生物や植物をじっくり観察して、自然の豊かさ、大切さを再認識しました。そして、１日目の班学習。今年度は、戦争班、文化班、歴史班、スクールトリップ班の４つの班が構成され、各班で沖縄を様々な視点から見つめて学習するとともに、それらを共有することで、団体としての深い学びにもつながっていきました。３日目の全体学習では、沖縄国際大学の方々と交流し、「沖縄戦」について学びました。沖縄戦の経験者が少なくなってきている今日、非体験者の私たちができることは何か。戦争体験者の語り部さんによる講和のあと、沖縄国際大学の学生とのディスカッションを行い、現地の方だからこそ感じるもの、一方で現地の方でさえも疑問に思うことを共有したうえで、それらについて話し合い、教職課程を取っているということから、「戦争と向き合う生徒を育てるには」というテーマのもと取り組みました。沖縄、沖縄戦について深く学んだあっという間の４日間。また、仲間の大切さも改めて認識しました。学んだことが数多くあるなかで、それらを個人個人がどのように捉え、次につなげていくのか。答えは一つは限らないこそ、さらなるステップに向かって、問い続けるとともに、この研修をつなげていきたいと思います。

【今後の活動内容】

今後の活動としては、事前学習会を通して学んできたこと、現地で学んだこと、新たに発見したことをそのままでは終わらせないために、事後学習でこれまでの学習を振り返るとともに、班学習や研修で学んだことを個人でレポートに取り上げ、沖縄でお世話になった方々も含め、全員で共有する予定です。また、４月から８月にかけて、衣笠・ＢＫＣ・朱雀の３キャンパスで、教職課程を履修している学生を対象に参加者を集めていきます。今年度のテーマである「繋ぐ～何を学びどう発信するか～」が昨年度のテーマである「伝える」にもつながっていることからも、今回学んだことをまたさらにつないでいくとともに、個人でも、これまでの学びを通して得たもの、現地で実際に見て聞いて触れることによって得ることができたものを通して、これからも様々な視点からものごとを見つめ、また来年度の活動に何らかの形で結びつけることができるよう意識していきたいと思っています。また、事後学習では、これまでの事前学習も含め、沖縄研修のことを個人、班、全体で振り返ることで、研修までに抱いていた疑問に対する個人での考えを共有し、また新たに発見した疑問や、得ることのできた知識を出し合って、全員でまたさらに学び続けるとともに、今年度の反省点を見つめ合って、来年度の教職沖縄研修が、またさらに有意義なものになることができるように努めていきたいと考えています。

～環境学習～沖縄の自然に触れるとともに、色々な発見をしました。

～全体学習～沖縄国際大学の方と「沖縄戦」について議論し、たいへん有意義な時間になりました。

～交流会～班学習で学んだことを発表し、お世話になった方と交流を深めました。

～活動内容～

４～８月　衣笠・BKC・朱雀の３キャンパスで参加者を募集

９月　月に一度の事前学習会

10 月　月に一度の事前学習会／実行委員会決定・週３回の会議

11 月　月に一度の事前学習会／実行委員会議

12 月　月に一度の事前学習会／実行委員会議／班決め・班活動

１月　月に一度の事前学習会／実行委員会議／班活動／各班で進捗状況の発表

２月　月に一度の事前学習会／実行委員会議／先生方をお呼びして各班での活動発表／沖縄研修

最終日。色々なものが詰まった４日間。沖縄研修って最高です

教職沖縄研修で、仲間とともに一緒に学びませんか？

ORTIZ

活動テーマ

地域プロスポーツの現場へ実際に足を運び、

プロスポーツビジネスや地域との繋がりを

体験し学ぶことで、スポーツを通じた地域創生を考える。

活動内容

高知県のプロ野球チーム、高知ファイティングドッグスにインターンとして参加し、経験をもとに学内発表を行った。

活動期間　9月10日～9月18日

場所　高知県、香川県、

・試合運営

　グッズ販売、球場アナウンス、球場内清掃、テント設営など

・地域交流

　ホームタウン訪問、テレビ局見学、ボランティア活動など

ある一日のスケジュール

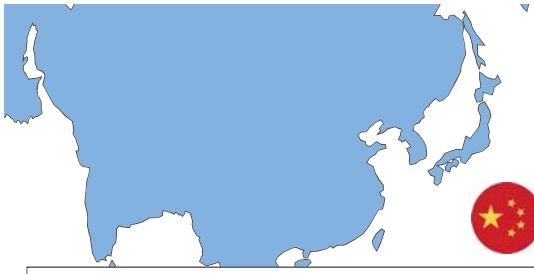
10時	球場到着 グッズ制作・球場付近の清掃・打ち合わせ 球場内外テント・広告・売店などの設営
18時	試合開始 受付、グッズ販売、売り子、 アンケート調査、球場アナウンス
20時ごろ	試合終了 設営設備の撤去、翌日の遠征の荷物整理
22時過ぎ	解散

活動の成果

地域密着型プロスポーツビジネスを体験し、独立リーグならではの試合運営を知ることができた。地域密着型のチームを目指すためには、球場周辺だけでなく、ホームタウンなど様々など場所でボランティア活動などを通じて地域の人々と交流を深めていく必要があるとわかった。

今後のビジョン

地域貢献活動は数値化することが難しく、実際に貢献できているかは判断しづらいという課題があるため、案一つで簡単に改善するのは難しいことがわかった。そのため、今後も研究を継続していく。



China-Japan-Korea Student Peace Dialogue

–2018年度活動報告–

Who is CJK Student Peace Dialogue?：

本学国際関係学部君島ゼミ[平和学]を母体とし、他のゼミからも複数名の学生が加わったチーム。

例年度は日中・日韓と別で会議を実施してきたが、今年度より３カ国同時での会議が実現。

Our Vision：

メディアなどを通じて他国を知るだけでなく、直接同世代の日中韓の学生と同じカテゴリの問題について検討・報告・議論をすることにより、多角的視点を身につけるとともに、自らの物の見方を相対化する。

日中韓の学生とのダイアローグを 中国・復旦大学(上海)にて開催

- 中国の復旦大学日本研究センターを会場に、日本：立命館大学、中国：復旦大学(Fudan University)、韓国：キョンヒ大学(Kyunghee University)から総勢約30名の学生が集い、8/30～8/31の二日間プレゼンテーションとディスカッションを行った。
- ４つのセッション内に設けられたサプトピックに基づいて、各国の学生が報告、それを元に議論を行なった。
- 同世代の学生と議論を行うことで、同じ物事に対する各国の同世代の学生の関心の度合いや考察・主張の仕方に気づきを得ることが多く、大変刺激的な濃い時間を過ごすことができた。
- 外交トラックも多様化する現代において、民間レベルでの交流や議論、それによる自己の認識の相対化という機会を設けることは、今後も意義があることだと思われる。

ダイアローグにより得たこと

・自国や自国の政策が、他国の学生から見てどう映っているか、ということの認識.
・ある問題に対する注目度の差異の実感.
・自らの「常識」や「バイアス」の相対化と脱構築・再構築への一歩に.

得た成果の還元

・高校生を対象とした東アジア模擬首脳会談の実施
・学内オープンゼミナール 大会への参加

今後の展望

次年度の日中韓の学生でのダイアローグの開催も決定している。ダイアローグのコンテンツ設計はもちろん、それに臨むまでの下準備やインプット・アウトプットについても欠かさず行いたい。加えて、他の同世代の学生や市民に対しても広く議論の場を設けることができるような企画を設計・実施できるようにするべく、活動を継続していきたい。

お問い合わせ先：mail：kimijima.zemi@gmail.com (立命館大学国際関係学部君島ゼミ[平和学])

©CJK Student Peace Dialogue 2018

「タイへ、地元京都から。」

規矩琴香、上田琴音
杉元美沙希、前川理紗

活動テーマ：
タイの教育不足の根本「貧困撲滅」に向け、子どもが自ら強みを見出し、将来に熱を注げる地盤をつくる

目標：タイの高校生の教育意識の改善

主な活動：タイの高校生に向けた職業選択のサポート

渡航先:
タイ・ルーイ

訪問先：Princess Chulabhorn College
SSH校（英語も必須）
全奨学制・全寮制
日本語の授業あり

- **将来を自ら考え、選ぶ**
- **現在と繋げ、逆算する**
- **今学ぶべきことを知る**

キャリアについて考えるワークショップ

1日目：強みを知る

自己紹介、趣旨説明をした後、アイスブレイクとして人間知恵の輪を行い、みんなとの距離が縮まりました。

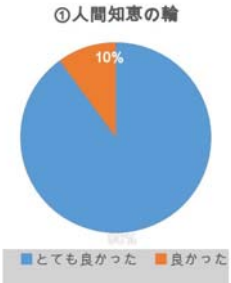
その後、それぞれが興味のあることをつなげて書いていくブレインストーミングを実施。書いたことを周りとシェアし合いました。

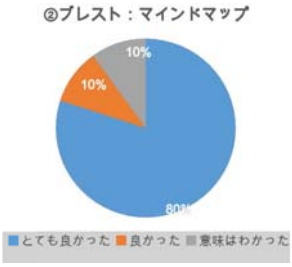
2日目：職業を知る

職業かるたは、大盛り上がり。生徒達は、日本の文化に触れながら、様々な職業について知ることを楽しんでくれたようでした。

ゲームを楽しんだ後は、自身が何の職業に興味があるか、その理由、その職業に必要なスキルなどについて書き出し、発表し合いました。

アンケート結果





③かるた
１０人全員一致：「とても良かった」

私たちのテーマとしている将来のことについてだけではなく、他国の人とコミュニケーションを持つことや文化等にも興味を持ってくれました！
（アンケート自由記述欄参考）

今後の活動について

①今後は、各自今回体験したことを**発信**していきたい
②タイの学校との**繋がりを保っていきたい**

高校生に向けて自主活動を組織化していく方法や進路との関連性を考えるヒントを伝える講演を行いました。

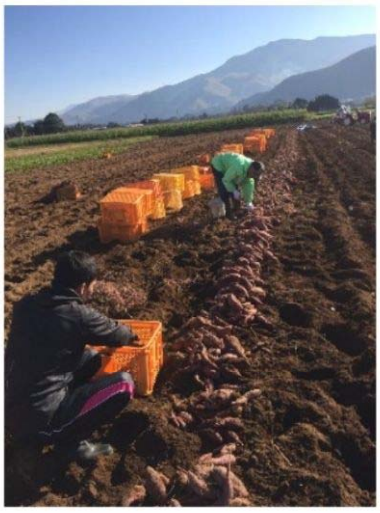
総括

- 自主的に発足した団体だからこその組織づくりを一から学べた
- 教育「意識」の改善は、同じ学生としてできる社会貢献の第一歩だと気付いた
- 貧困をとりまく原因を理解し、対象とした地域や人のニーズに自分たちなりに応える事ができた

くまだす＋R

団体の活動目的、主な活動

　熊本で、今まで農業ボランティアを中心に行ってきました。設立前に立命館大学の災害復興支援室が西原村にボランティアを西原村に派遣していました。派遣が終了した際に「これからも継続していくべきだ」と有志が集まり、農業ボランティアを踏襲、継続してきたしだいです。**西原村にある百笑応援団という、農家さんとボランティアの間に入って調整する中間**支援団体にお世話になりながら、農業ボランティアをさせてもらってました。



スタディーツアー

　長期休暇中にはスタディーツアーも実施しています。直接現地に足を運んでもらうことによって想像とは違う正しい熊本・西原村の今を知ってもらうこと、さらには熊本の人のあたたかさやおいしい食べ物、きれいな景色など魅力を知ってもらうことにも目的をおいて実施しています。

内容としては農業ボランティア、熊本城視察、東海大学生の語り部、仮設住宅や復興住宅にお住まいの方々とのお話、西原村のドキュメンタリー映画の鑑賞・フィールドワーク、観光などを盛り込んでいました。

今後について

私たちは団体の組織化がうまくいかなったことや現地の変化に対応できなかったことを背景に2018年度をもって活動を終了いたしました。

聴覚障害の大学進学率の向上を目指す　つ　な　が　る

～「つながる」とは～

「つながる」は聴覚障害を伴った高校生の大学進学率の向上を目指して、聾学校の高校生を対象に 2017 年度から**ミニ・オープンキャンパス**を開催している団体です。今年は聾学校 3 校から 12 人の高校生に参加してもらい、新たな取り組みとして、実際に授業をしている日に開催したことや、昼食を食堂でとることなどをしました。

～「つながる」の活動内容～

○ミニ・オープンキャンパスの開催

○ミニ・オープンキャンパスのフィードバックも兼ねた聾学校訪問

○聴覚障害に関する勉強会

○学内における PC テイク講座

ミニ・オープンキャンパス

～2018 年 10 月 9 日(火)～

～食堂で昼食～

実際の食堂で昼食を食べてもらい、

大学生気分を味わってもらいました。

～キャンパスツアー～

手話通訳士の方についてもらい、学生がキャンパス内を

紹介していきました。

図書館ではパソコンを借りる体験もしました。

～模擬授業～

国際関係学部の教員をお招きし、講義をしていただきました。

聴覚障害の学生が実際に受ける PC テイクも体験しました。

～レクリエーション～

大学生がどのような日常を送っているか

知ってもらうことや聾学校の学生同士が

仲を深めるレクリエーションをしました。

～勉強会について～

今年度の勉強会ではミニ・オープンキャンパスを開催するにあたって、聴覚障害者の現状を理会することを目的にしていました。主な内容は聴覚障害に関する本の輪読をはじめとして聴覚障害者が直面する「9 歳の壁」や手話をテーマにしました。勉強会の中でこれまでに得てきた知識や体験してきたことを共有など、積極的な議論を展開することができました。

～今年度の活動を通して～

今年度はよりよいミニ・オープンキャンパスを開催するために勉強会や PC テイク講座を開催しました。勉強会では聴覚障害者がぶつかる「9 歳の壁」や手話などをテーマに開催し、聴覚障害の当事者が向き合っている困難や少しでもコミュニケーションを取ることができるよう努力しました。また、勉強会に「つながる」メンバー以外の人を巻き込むことにより、聴覚障害者について考える機会を作ることを目指して実際に巻き込むこともできました。

政治哲学研究会

P・P・S

―デモクラシーってなんだろう―

政治について私たちができる事ってないの？

一昨年・昨年と財務省の文書改ざん問題や森友・加計学園をめぐる問題がニュースをはじめとするあらゆるメディアで話題になりました。しかし、改ざんや不正を行ったトップの政治家達は未だその地位や権力を失っていません。そもそもなぜこんな問題がおきたのか、その構造を探るために、私たちは「文書主義」や「官僚制」、「民主主義」をキーワードに研究会を立ち上げました。

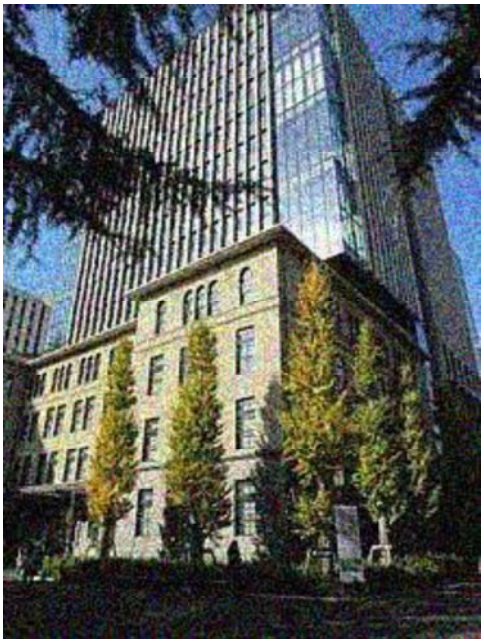
立命館政治哲学研究会 PPS とは

“ちいさな部屋から民主主義を”、をテーマに政治哲学の古典をみんなで「うーん((+_+))」とうなりながら一文一文の解釈を現実の問題と照らし合わせ議論している研究会です。

また、部屋だけにとどまらず外の色々な研究会や学会にも参加し、一線で研究をしている学者たちとも交流を交わしており、一年を終えたのちにはそれぞれの問題関心を論文にまとめて論集を作成しています。

実施企画

8 月 10 日に、早稲田大学の政治哲学研究会の主催した『公開性の根源-秘密政治の系譜学-』（大竹弘二,2018 年）の公開合評会イベントに参加しました。



イベントの成果

大学学部生・大学院生・Ph.D.・大学教授・専門研究員・一般参加者がそれぞれの政治に対する熱い思いをぶつけ合い、今の政治をより良くするにはどうすればいいのか白熱した議論が繰り広げられました。我々研究会のメンバーも、研究書に関する質問や哲学的で高度な問いを掛合いました。

そこではまさに政治哲学者の J・ハーバーマスの言う「市民的公共性」の実現、つまり民主主義の萌芽を見ることができました。

～宗田勝也氏　講演会～

～学内イベント　“難民問題ニフレル”～

【来年度の目標】
これまでの認知啓発活動を継続することに加え、新たな取り組みを模索したい。また、難民により寄り添った団体にしていきたい。

～第２回 PASTEL キッチン～

なんみん×学び

●「勉強会」・・・

月に一度難民問題に詳しい講師の方をお招きして、公開勉強会を行なっています。近年の難民情勢や難民問題の発信方法などさまざまなフィールドでご活躍の方から貴重なお話を聞くことができます。皆様もお気軽にご参加ください！
～これまでの講演者～
（元 UNHCR 職員　マクトフ氏、難民ナウ！代表　宗田勝也氏、在日ビルマ人　ココラット氏など多数）

●「学内イベント」・・・

毎年、６月 20 日の「世界難民の日」に合わせて、独自にイベントを開催しています。
今年度は“難民問題ニフレル”と題し、勉強会で得た知識を生かしながら難民キャンプの報告会とワークショップを行ないました。

はじめまして！私たちは「私たちも難民もパステルカラーに！」をモットーに、立命館大学で唯一難民問題について研究・支援を行なっている団体です。一緒に難民問題について考えてみませんか？

メールアドレス

pas_tel0620@yahoo.co.jp

Facebook

PASTEL.refugees

Twitter

@pa22te11

2018 年度

難民支援・研究団体

PASTEL

なんみん×食

●M４R（meal for refugees）　目指せ 10000 食！

この活動は生協さんとコラボして難民の故郷の料理を学食で提供し、１食につき１０円を難民支援協会の寄付金にあてるという取り組みです。立命館大学は全国で最大規模の実績を誇り、今年は“ガラムマサラ炒め”と“豆とトマトの野菜煮”を３キャンパスで７０００食売り上げました。

ご協力ありがとうございました。次回もお楽しみに～！

●PASTEL キッチン　NEW

月に一度、大学のキッチンスペースを使って料理を作り、学生同士食事を囲みながら難民問題について語り合うイベントを開催しています。

忙しない日常生活の中で１分でも多く難民に思いを馳せる時間をもってもらいたいという願いから始めました。

●地域のイベント

地域のイベントでブースを出店し、難民の故郷の料理やシリア人女性が作ったアクセサリー類を販売して認知啓発活動を行なっています。市民の方や他大学の学生など、立命館という枠を超えた繋がりがたくさんできる貴重な機会となっています。

→アクセサリーについては
「イブラ・ワ・ハイト」で検索！

メラウー難民キャンプ訪問

毎年２月に、メンバー数名がタイとビルマ（ミャンマー）の国境にあるメラウー難民キャンプに訪問しています。子ども達との交流を通して難民キャンプの現状を実際に自分たちの目で確認し、帰国後報告会を行なっています。今年度からは新たに 「MLOkids 教育支援プロジェクト」を立ち上げ、家に眠っている文房具や遊び道具を日本からキャンプの子ども達に届ける取り組みも始めました。

「充実した教育を提供し、夢を見つけられる環境を創出したい。」

私たちの思いに共感してくださる方から、たくさんの文房具そして“心のバトン”をいただきました。

ご協力ありがとうございました😄来年度からはさらに本格的に活動していく予定ですので、今後ともよろしくお願いいたします。

RISP　立命館インクルーシブ・ソサイエティ・プロジェクト

目的　スポーツを切り口に共生社会の実現の一助となるような活動

テーマ 〈障害者スポーツ・パラスポーツ×教育・社会・学校〉

背景

①学習指導要領の改訂に伴い、障がい者理解やオリパラ教育が推進されている

②義務教育からステレオタイプを除いて障がい者と接することが必要だと考えている

方法

子ども対象イベント
〈障害者スポーツを　知る！する！つくる！〉

小学生を対象に体を動かしながら考え学ぶことができるワークショップを行った。子供たちの関心や興味に目を向け、障害者スポーツ・パラスポーツ、そして、共生社会に少しでも関心を持ち続けてもらえるような企画にした。

教職員対象イベント
〈学校から広がる共生社会〉

学校現場におけるパラ教育の充実を図るため教職員と教職を目指す学生対象にパラ教育についての講演会を企画した。様々な教職員また学生同士が交じり合うことによって成り立つ意見共有の場を提供することにもつながった。

活動の成果

今年度は1年を通してイベント内容を一から自分たちで考え、実行したため、つまずくことが非常に多かった。ビジョンは見えていてもそれを実行することがなかなか難しく、具体的な計画を練って、定期的にミーティングを開き円滑に活動を行う必要があると感じた。また、メンバー内でも、団体の活動の参加に差があり、メンバー間の共有ができていないことも反省の１つだ。今後1人1人が自覚をもって活動をしていくためにも、意見交換の場をもっと設けるなどして団体内の繋がりや関係を深めていく必要があると考える。

今後のビジョン

今年度の経験から、組織マネジメントや、イベントなどのノウハウが足りていないことを痛感した。今後はこの経験をもとに、ノウハウのある組織との連携を通してまずはプロジェクトスタッフ全員で団体の基盤を作るためにも多くのことを学ぶ必要があると感じている。
また学びを通して私たちのビジョンである共生社会の実現とはどういうことなのか、何をしていくべきなのか改めて考え、主体性や考察力を伸ばしていきたい。

立命館大学 AVA (Athlete Volunteer Association)

活動テーマ：大学スポーツの振興・発展に繋がる大学内外での
コミュニティ・環境作り

活動内容

学外事業部

・学外の企業・団体とコラボによる
キャリア関連等のイベントの実施

学内事業部

・栄養学セミナーの実施
・立命館生協様との特別定食プロジェクト
・体育会体育祭 2019への参画

地域事業部

・原谷・柊野・衣笠・金閣学区における
地域清掃、地域イベントへの参画
・台風21号で被災した平野神社での
復興支援活動
・学外の団体様とのコラボによる
スポーツを通じた地域貢献活動への参加

広報部

・ソーシャルメディア、公式サイトによる
立命館大学体育会、AVAの活動の発信

@RITSUMEIKANAVA

@ritsumeikan_avaofficial

活動の成果:
- 大学アスリートの「思考」の部分へポジティブな影響を与えられた
- 大学スポーツを通じた地域コミュニティの発展への寄与。
→ 地域の方が試合に応援に来てくださる姿を見かける、地域の会報誌にも掲載いただく/
第６３回京都市市民憲章推進者区長表彰 受賞。
- 体育会の横の繋がりの機会、環境の創出

今後のビジョン:
・大学スポーツを通じて、学内の横の繋がりを強化し、大学を盛り上げていく
・立命館大学 体育会が地域の方々からさらに応援されるためのアクションを起こす

International Development Field Camp
for Myanmar and Japan Youth Leaders 2019

①-1. IDFCとは

WHO
日本ミャンマーの次世代リーダーが
WHERE
日本ミャンマーで共同生活をしながら
HOW
社会課題に向き合うことを通じて
WHAT
新しい価値観を創造し、
様々なセクターに変化を与えるプログラム

©IDFC 2019 All rights reserved

①-2. 私たちが目指すもの

理念

ミャンマーと日本の若者自ら交流機会を創り、
将来に向けて関係を築いていく

ミッション

①リーダーシップの育成：

挑戦を応援する場の提供・相互理解の促進

自分の能力や可能性に気付く・アントレプレナーシップ育成

②日緬のプラットフォームへ：

世代を超えた交流機会の創造

©IDFC 2019 All rights reserved

①-3. 団体概要

►団体名：International Development Field Camp
for Myanmar and Japan Youth Leaders (IDFC)
►団体の種類：任意団体
►設立：2014年5月
►沿革：

14年 12月	IDFC2014開催 [ヤンゴン] (参加者：日15名・緬15名)	テーマ **"Career Development"**
16年 2月	IDFC2016開催 [マンダレー] (参加者：日18名・緬20名)	**"Community Development"**
17年 2月	IDFC2017開催 [ヤンゴン] (参加者：日17名・緬17名)	**"Beyond the Change"**
18年 2月	IDFC2018開催 [ヤンゴン] (参加者：日12名・緬15名)	**"Happiness"**
19年2月	IDFC2019開催[ヤンゴン・東京] (参加者：日11名・緬15名)	**"Seeking New Values"**

©IDFC 2019 All rights reserved

②-1. IDFC 2019 事業概要

IDFC 2019事業概要	
事業名	International Development Field Camp for Myanmar and Japan Youth Leaders 2019 (以下 IDFC 2019)
主催団体	IDFC実行委員会
事業概要	ミャンマーと日本の学生26名が、ミャンマーの2都市(ヤンゴン、東京)にて、約1週間共同生活を送りながら社会的課題に取り組むプロジェクト。
開催期間	2019年2月10日(日)~2月20日(水)
参加者	ミャンマー側15名、日本側11名
IDFC2019テーマ	Seeking New Values (環境、教育、社会包括)
後援	一般社団法人日本ミャンマー友好協会,在ミャンマー日本国大使館, JETRO・ヤンゴン事務所, JICA・ミャンマー事務所,ミャンマー日本商工会議所,ヤンゴン日本人会
助成	関西・大阪21世紀協会, 国際交流基金アジアセンター, 立命館大学,双日国際交流財団, 三菱UFJ国際財団
協賛	All Nippon Airways Co., Ltd., Enervon – C, Kanbawza Bank Ltd., MPT-KSGM Joint Operations, J-SAT Co.,Ltd., Coca Cola Pinya Beverages Myanmar, FUJIFILM Myanmar Investment Limited, Fuji Xerox Asia Pacific Pte Ltd.(Myanmar Branch), Htoo Foundation, Japan Outsourcing Service Co., Ltd., Myanmar Value Creation, Panasonic Asia Pacific Pte. Ltd.(Myanmar Branch)

②-2. プログラム内容

IDFC2019では社会課題・文化理解・人的理解の3つのコンテンツの軸を設定し、「Seeking New Values」というテーマを設けた。
また、ゲストお招きしてミャンマー事情についてのセミナーを開催したり、パブリックイベントにて協賛企業や後援団体の方々との交流機会を創った。更には、在ミャンマー全権日本大使の丸山一郎氏の公邸でのレセプションにもお招きいただいた。

©IDFC 2019 All rights reserved

②-3. プログラム内容

SEEKING NEW VALUES SEEKING NEW VALUES SEEKING NEW VALUES SEEKING NEW VALUES SEEKING NEW VALUES SEEKING NEW VALUES SEEKING NEW VALUES

社会課題コンテンツ
「環境・教育・社会包摂」の三つの分科会を設け、
・現場で指揮を執るリーダーからお話を伺い、課題を発見、意見交換をした。
・両国でのサイトビジットを行い、比較を行った。
・最後はシンポジウム・写真展示・ウェブサイト・アフタープログラムにて、議論した成果を社会に対して発信した。

©IDFC 2019 All rights reserved

③-1. 昨年度の課題と解決方法

・課題：①両国開催による体調の崩れ　②コンテンツ過多による弊害
・原因：①タイトスケジュール　②コンテンツの軸の多さ
・解決方法：②参加者を気遣った睡眠時間の確保　②軸を絞る

IDFC2019

①初の日本ミャンマー両国での開催によって、寒暖差やタイトなスケジュールによる体調の崩れでプログラムに参加できない参加者がいた。
②コンテンツを詰めていたため、一つ一つのコンテンツの学びが浅かった印象を受ける。

↓

IDFC2020

①参加者に合わせた睡眠時間及び参加者同士の交流がしっかりと確保できるスケジュール設定を行う。
②今年度設定した3つの軸から1つないしは2つに絞ることで参加者の学びを確保する。

©IDFC 2019 All rights reserved

English Café

実施したイベント

第1回　11/8

団体の広報のためにたこ焼きを作って食べながら交流会を行った。主にお互いのことについて英語と日本語で話し合った。

第2回　12/11

衣笠BBPに場所を移し、ゲストスピーカーを招く形でイベントを実施、ツーリズムについてお話ししていただき交流も図った。

第3回　1/9「Origin of Japanese Pop Culture」

衣笠BBPとコラボし、協力の元映像学部の教授をゲストスピーカーを招いた。

第4回　1/16「Dealing with cultural Differences in Italy, Wales and Japan

2018年度最後のイベント。
異文化間のテーマにしたトーク、
そして交流をした。

活動目標

参加者が英語と日本語を使って意見交換の機会を設ける

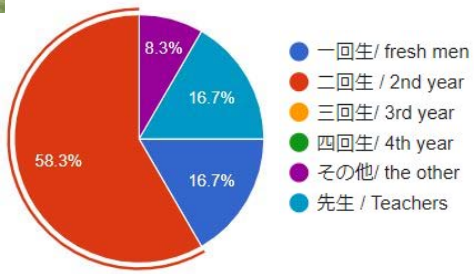
様々な学部の先生や生徒の学んでいることや経験などを聞き知見を広める

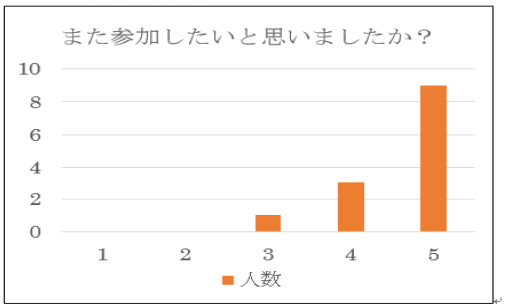
活動テーマ

自分の知らないものに出会う

相手を知り、自分も発信しる

参加者のアンケート結果(一部)





＊参加したい度合：1～5

活動の成果

得たこと

- ◆ イベントごとに招くゲストスピーカーや協力してくださったBBPのスタッフや教員の方たちとのコネクションが広がり、沢山の出会いとつながりが出来た。
- ◆ 考え出した活動を計画し実現する計画力と行動力がメンバーの中で身についた。

失敗から学んだこと

- ◆ 一番初めのイベントを参加人数が満たさず中止してしまったため、準備してきたメンバーとの団結が緩み、メンバーが減ることになった。このことから、自分たちがしている活動に自信を持ち、計画し実行する勇気を大切にすることを学んだ。
- ◆ 広報での人集めや、ゲストスピーカーを探す問題に直面した時、自分たちだけで解決を試みるが解決には辿りつけなかった。その時BBPスタッフや教員などに協力を求め、解決に進むことが出来、他方面からの意見や考えを頼る必要性もあると学んだ。

今後のビジョン

- ◆ 2019年度のからも継続して活動し、活動の規模の拡大を目指す。
  →メンバーを新たに集める
- ◆ English Café の引き継ぎを考える
- ◆ 2019年度の夏に大きめの規模のイベントを目標とし、企画する。

団体連絡先：englishcafe88@gmail.com